

## すべての子ども達が「分かる」「できる」授業の発展 ー「ジェンダー平等／多様な性・生き方」の学びから自他尊重の関わりを築くー

本村めぐみ（研究代表：和歌山大学）

向井直樹（和歌山大学附属特別支援学校）、土井一真（和歌山和歌山県立星林高等学校）

鶴岡尚子（東京医療保健大学和歌山看護学部／元・和歌山大学附属特別支援学校）

### 1. はじめに

#### 1-1 本研究の経緯

本研究は、2021年度から4年に渡り継続的に一貫して実施してきたものである。研究をスタートした動機は、小・中・高・特別支援学校全体において、とりわけ「多様な性」に関する教育実践の必要性を教員たちが軽んじる傾向への問題視にあった。しかし、当時から社会的風潮も変化を遂げ、今や小学校教員の97.9%が「多様な性」の学びは「小学校入学前から小学校高学年までの間に教え始めるのがよい」と回答している（認定法人Rebit調査,2023）。一方、各教育現場では教員自身が「分かりやすい正解を示しにくい」さらに「実践方法が分からない」ことを背景に、現状としては子どもたちに体系的な学びの機会を保障することには、大きな困難を抱えている現状は否めない。

なかでも特別支援学校における知的障害のある生徒たちにとっては、日常生活の自立や基本的な社会的スキルの習得が優先されることが多いため、「性」やその多様性に関する学びは、後回しにされる傾向が強い。しかし、その学習機会を保障し、生徒たちが「性」をめぐる多様さを知り、理解を深めることは他者との違いに目を向けながらも自身を見つめ直し、自他尊重を伴った人間関係を育んでいくための社会的スキルに貢献し得る基盤となることも、本共同研究では示唆してきた。

一方、過去の授業実践には幾つかの課題があった。それは第一に、授業を通して、生徒たちは、「性的に＜少数者＞と言われる人たち」の存在を理解しながら「そうした人々は社会のどこかにはいるが、自身の生活圏内にはいない」という認識に留まる傾向があったことである。第二に、「多様な性」の学びは生徒たちが将来のセルフデザインを見越した際、どのくらいに当人たちをエンパワーメントし得たものかの把握が不十分であったことであった。これらの課題を前提に、2023年度には、和歌山大学附属特別支援学校・高等部2年生を対象とした授業実践を「ジェンダー平等」の考え方から「多様な性の学び」へと移行する3部構成によって実践した。ここでは特別支援学校の生徒を対象としながらも、小・中・高・特別支援学校に通う「すべての子どもたちが分かる・できる」理念を意識し、よりユニバーサルな授業・教材づくりを目指した。詳細な授業実践内容は、2023年度の成果報告書を参照して頂きたい。

#### 1-2 本年度の研究の目的

本年度（2024年度）における研究の目的は、約1年前に実施した特別支援学校における授業実践の成果を、前年度のアンケート調査による数的データと照らしつつ、授業に対する生徒たちの生の語りをワークシート及びインタビュー調査によって抽出し、授業成果をより詳細に把握することである。その際、生徒一人一人の知識や、新たに獲得した価値観の定着度と共に、本授業における学びが、生徒たちの現在から将来に渡るセルフデザインに、いかなる貢献を成すものとして認識されているかを探ることを主な観点とした。

## 2. 方法

### 2-1 インタビュー調査の対象者

本研究のインタビュー対象者は、2023 年度に共同研究者である向井教諭が特別支援学校高等部において担当した授業に出席した 4 名である（男子 2 名／女子 2 名）。なお、授業出席者は当初 5 名であったが、調査前に転校をしたために、この生徒に対する調査は実施不可能であった。調査期間はワークシート作成を含めて 2024 年 12 月～2025 年 1 月初旬である。インタビュー調査の時間は一人につき 30 分程度である。方法としては半構造的面接法を用いた。調査実施にあたって和歌山大学研究倫理審査会に諮り承認を得た。調査時には、調査趣旨および倫理的誓約を対象者ごとに丁寧に説明し、同意書を得た。

### 2-2 調査における主な概念コード

本調査の対象者となる生徒は「書くこと」「考えること」「話すこと」にみる個々の特性がそれぞれ異なっていることから、事前に、以下に示す概念コードと整合する 3 つの質問に対する回答をよく考え、ワークシートに書き込む作業を依頼した。インタビュー調査は基本的にそれらの記述内容に基づきながら展開した。

#### ①概念コード 1：約 1 年前に実施した授業による知識、価値観の定着度

【質問 1】「ジェンダー」「多様な性」の授業について、今もよく印象に残っている内容とその理由を教えてください。

#### ②概念コード 2：身近な生活圏に生じているジェンダーバイアスへの気づき

【質問 2】授業後、あなたの身近な暮らしや、周囲の人たちとの会話の中で「これは間違ったジェンダーや性についての思い込み（固定観念）だ」と感じた・気づいた出来事がありましたか？（考える作業を促すために、3 つのバイアス事例も提示しておいた。）

#### ③概念コード 3：将来、性的少数者を自認する人から相談を受けた際の行動や態度

【質問 3】高校卒業後に、あなたは「同性を好きな人」や「トランスジェンダー」などの性的少数の人に出会いました。その人が「自分は他の人と違うから仲間外れになってしまう」と、あなたにだけ悩みを相談した時、どのような言葉をかけたいですか。

## 3. 調査結果と考察

### 3-1 ワークシートにみる記述と主たるインタビュー調査結果

以下では、生徒達のワークシート記述内容とインタビュー調査における語りをデータとして提示し、幾つかの考察を加えたい。

#### 1) 生徒 A

ワークシート（質問 1）において、印象に残っている学びとしては「男性器と女性器の間にある性器の存在」と記述された。その理由は「**てっきり、体の性別って胎児の時に、はっきりしていると思っていましたが、はっきりしていないものもあって驚きました**」と表現されていた。

授業では出生時に割り当てられた性別でさえ男女に二分化できない性分化疾患といった事例を「性の多様性」授業の冒頭で扱った。生徒 A は「生物学的な性だけは男女いずれかに決まっている」という固定観念が覆された事に最大のインパクトを受けたことが分る。これは、最初に生徒たちが信じて疑いようがない通念を覆す事によって性自認や性指向、性表現の多様性へと展開する意図をもって教材づくりを行った 1 つの成果とみなされた。

身近な生活圏に生じているジェンダーバイアスへの気づき（質問2）では「一人一人の個性じゃなくて、男性や女性の性別を見ての決めつけをしているのが、偏見さを感じます。他人が見た目と性別に対してどうこう言いつけている時点で、歪な観念だと思います。事例1（固定的なジェンダーロールを当然視する家族の事例）に限っては、時代遅れの当り前さを感じて、どうかしていると思います。」と記述された。これに関連して自らの家庭内には、こうしたジェンダーバイアス事例に気づくことはあるかを尋ねたところ、しばらく考えた後に「ないですね」と回答された。ここで、NHKによる中高生とその親を対象としたジェンダーに関する意識調査（2022年）の一部を紹介し、「父親の8割が自分の息子を男らしく育てる」ことに賛成している実態について考えを尋ねたところ、「（男性らしさの発揮を息子に強いる父親に対して）あなたは、できますか？」と伝えたいと語られた。さらに「自分ひとりでそんなに抱え込んで大丈夫ですか。家族に弱い部分をちょっとずつ見せて助けて貰う方がいいんじゃないですか。」と、世間一般の父親に対する助言的な語りまで行われた。ここには生徒Aが、少なくとも家庭内における仕事や家事育児をめぐる伝統的な性別役割分業を完全に相対化し「（自分が結婚をした際には）ずっと一緒に協力して暮らす」ことが、社会的にも自身の将来の暮らしにおいても望ましいと考える確固とした価値観を、授業後も揺るぎなく持ち続けてきたことが示唆された。

質問3として、性的少数者からのカミングアウトを受けた際の言葉がけとしては「突然の不安、と思ったらすぐに報告、連絡、相談をするようにお願いしたいです。私が必要と言ってくれたら、できることなら、できるところまでやってみます。くれぐれも無理はしないでほしいです。」といった当事者に全面的に寄り添う気持ちを表す言葉が記述された。インタビュー調査では「最低限としては、（その人の）隣にいる。時間はかかるかもしれないけど、悩んでいる人らの団体をつくって、間違ったことを言ったりする人を（認知バイアスを）直してもらおう。」と、極めて具体的なアクションプランまでを念頭に置いている語りが観られた。また、自身が性的少数であると自覚したと想定した際には「（他の人と）違ったら違ったで、それでええかなと思ったり。違う分が嫌やなって思ったら他の人に相談して（ストレスを）抜くとかそんな感じですね。」と語られた。生徒Aが「悩みを一人で抱え込む必要はなく、他者と協働して解決を図っていく」といった志向性を持つことを可能にしたのは、本授業のみの成果とは言い切れない。しかし、高校2年～3年の間に重要な人生における価値形成の一端を、本授業が担ったことが推察された。

## 2) 生徒B

質問1における印象残っている学びとしては、「ジェンダーバイアス」と記述されており、その理由として「私も最初は女の子はピンクが好きや、かわいい物が好きや男の子は力が強い、青色が好き、カッコいい物が好きなどの色々な思い込みをしていたけど、授業を聞いて、男の人がピンクが好きだろうが、かわいいのが好きだろうが、女の子は力が強いだろうが、スポーツ好きだろうが、人それぞれやし、自分の好きな事をしたらいいと思いました」と記述されていた。生徒Bが「ジェンダーバイアス」という概念の意味を自身のことばで丁寧に正しく解釈している様子が、ここでは明確に観て取れる結果であった。

身近な生活圏におけるジェンダーバイアス事例への気づき（質問2）については、特にワークシートに参考事例として挙げた「男子がスカート履く」に関連して、以下のような記述が観られた。「人を見た目ではんだんするのはよくないと思います。わたしも最初は

**見ためではんだんしてしまっていたことがありました。男の人がスカートをはいていたら、うわっとつい言葉が出てしまった事もありました。でも、ニュースでジェンダーの話が出てきた時、みんながそれぞれ個性があふれていて、みんなすごく楽しそうにしているなあと、自分の考え方が変わりました」**

加えて、インタビュー調査では、生徒 B が授業後は特に「ジェンダー」や「多様な性」について取り上げるニュースや報道に自然に関心を持つようになって来たことが語られた。さらに、自身の家庭をかえりみた際に、娘である自分が重い荷物運びをする件で両親の間で価値観が異なっていた事例を思い出し、母が娘に持っていた役割期待（女の子だから重労働をさせたくない）を柔らかく制して「私も持てるよ」と自ら荷物運びに従事したエピソードが披露された。生徒 B は、昨年度のアンケート調査では授業前後のジェンダー平等意識を高めるスコアを最も伸ばした生徒の一人であったが、授業後の家庭生活のなかでも、授業で獲得した知識を行動へと繋げるための「**自信が持てるようになった**」ことがインタビュー調査では明かされた。

また、質問 3 のワークシートには「**そんなの気にしなくていいよー。私もいるし、相談できる場所もたくさんあるから、もしも、また、やな事があつたりなやみがあつたらいつでも相談して！！**」と記述されていた。インタビュー調査では間違った性の認識を他者に当てはめる者に対して「**自分のこと、からだのこともそうやけど、決めるのも全部、自分やから、そうゆう人のことはあんまり言わなくてもいいんじゃない？**」と伝えたいと語られ、授業以降もなお、自他尊重の考えを深め続けてきたことが示唆された。さらに、自身が性的少数者の当時者となったと想定した際には「**まずは、家族に相談すると思う。そのあとは、ちょっとずつ自分ひとりでもできることを増やしたい**」と着実なステップを踏みながら、葛藤が生じそうな他者との関わり形成も諦めない意志が語られた。

### 3) 生徒 C

生徒 C については、ワークシート記述への分量は多くはなかった。よって、以下に質問 1～3 まで記述された内容をまとめて列記して示したい。

**「(印象に残った学びは) 男性・女性だからといって決めつけない (こと)。(その理由は) 女の子だから、かわいい物が好きっていうのも良いから」「女の人だから、男の人だからと言っていたら自分の自由や好きな事ができなくて、しんどくなっていくから」「仲間外れにしてくる子と無理に仲良くしなくていいんじゃない？自分がこれから先も一緒に長くいてくれる子を探していった方が自分も気持ちが楽に過ごしていけると思うよ」**

生徒 C も「ジェンダーバイアス」に関する授業内容が印象的だったことをインタビュー調査では語り、自身の家庭を顧みた際に姉である自分と弟との間にジェンダーバイアスを持ち込まない家庭教育の在り方を再認識して「**良かったと思う**」と語られた。一方、世間一般に未だ残存する「男性が女性に対するリーダーシップを発揮すべき (父権主義)」という考え方については「**(恩恵を一方的に受け取られる) こっちも相手に悪いなと思ってしまう。おごられてばかりより、自分は割り勘がいちばんいい**」と、ジェンダー平等であることの心地よさは、男女に関わりなく同様であることが主張された。生徒 C から、家庭内においてはジェンダーに偏りのない育ち方をして良かったといった自覚を深めるなかで、その価値観を今後も自身のライフデザインに活かしていきたい旨が語られた。

#### 4) 生徒 D

生徒 C もまたワークシートへの記述分量は多くはなかったが、インタビュー調査時には十分な語りが抽出された。

ワークシートには「**(印象に残っている学びとして) 自分をどう表現するか。(その理由として) 自分や相手がやりたいこと、こうなりたいとかを大切にしないと人生のいろどりがなくなってしまうから**」と記述された。それを受け、今後はどのように自分を表現していきたいかとの質問に対して「**素のままに、ありのままにいきたいと思ってはいるけど、自分の素の状態で行って、相手が大変になったりするなって思ったら、そこはちょっと(自分を) 繕ったりはするかなあくらいに**」と語られた。自分らしさを尊重しながらも、相手を気遣うことを「**授業後は、もっとよく考えるようになった**」と自己を振り返った。

身近な生活領域におけるジェンダーバイアスへの気づきに関してはワークシートには「**自分はそのような状況には出会ってないです**」と記述はされていたが、前述した NHK 調査の結果には強く関心を示し、「**だから、親は妹にだけ甘いのか?**」と改めて兄妹間のジェンダーによる親の関わり方への違いを認識し、赤裸々に内情が語られた。その上で、子育てにみるジェンダーバイアスは「**特に子どもにとっては減っていく方がいいと思う**」ことを断言した。授業での学び、自身の家庭環境への振り返りも通じて、社会に依然として生じているジェンダーバイアスを再認識しながら「ジェンダー平等意識」を進める意義への洞察を、インタビュー調査での語りを重ねるごとに深めていく様子が観られた。

質問 3 では「**今の時代、それを気にする人は少ないと思うからだいじょうぶと思うよ。何かあったらまた話きくから**」とワークシートに記述がなされた。インタビュー調査では、「**中学の時から身近な友達が同性とかも好きになったりすることがあるから、そんな偏見は一切ないっすね**」と語られた。さらに、中学時代にはトランスジェンダーの教員との出会いを経験していることも語られた。この「当事者との出会い」が、学校教育期間の比較的早い段階にあったことは、授業前のアンケート調査結果（「多様な性」への理解が誰よりも成熟していた）からも生徒 D の価値形成に影響を与えていた要素と推察された。

生徒 D からは、もし、自身が性的少数者であったと想定した場合、「**その事実を周囲にはっきりと伝えておく。その方が周囲もそうした人間なんやと理解しやすいと思うから**」という内容の語りが得られた。それによって、周囲からの排除を万が一受けるような経験をしたとしても、「自分の強み、個性を活かして、少しずつ（他者との関係性を）変えていく」といった自信を持つようになったことも同時に語られた。

#### 4. まとめと今後の課題

本年度におけるワークシート分析およびインタビュー調査によって、本授業実践は生徒たちが個々の立場から「ジェンダー平等」「性の多様性」の学びを契機に「自他尊重」を目指すための知識や価値観を定着させた事に留まらず、将来的にも、自信を持って主体的な行動指針を各々が持つことを可能としたという意味において、一定のポジティブな成果を生みだしたことが明らかとなった。

今後の課題は、これらの授業実践で体系化した授業案および教材を公立小学校・中学校・高等学校において、いかに普遍化を目指していけるかについて、より現場の教員たちと共に着実な精査を重ねていくことである。